

2025 残雪期 槍ヶ岳北鎌尾根 山行記録



【日程】

2025 年 4 月 29 日（火）～5 月 1 日（木） 山行 2 泊 3 日

【参加者】

中山・土橋（記録者）

【装備】

- ・ 冬期テント泊登山装備
4 人用テント、スコップ、冬用ガス（レギュラー×3）、水作り用 1 L アルミ鍋
- ・ 登攀用具
軽量ハーネス、ロープ（8mm×50m）、カム（0.4、0.5、0.75）、アイゼン
アイスアックス（各 2 本）、他
- ・ デジタル簡易無線
- ・ 食料 3 泊 4 日分
- ・ その他個人装備

【記録】

昨年、土橋の体調不良によりリタイヤした北鎌尾根に再挑戦してきました。

再挑戦をすることは、昨年の下山時から決めていたことだったので、計画は昨年と全く同じでした。なので、事前の打合わせはラインで簡潔にする程度。あとは週間予報を見ながらいつ出発するか、そして入山後の天気予報に応じた対応ということだけでした。

■4月28日（月）

19時30分北九州発 東海北陸自動車道「飛騨清見IC」まで高速
交代で睡眠を取りながら順調に移動。

■4月29日（火） くもり ときどき 晴れ

5時ごろ高山市街で朝食 → 6時30分頃平湯あかんだな駐車場着 → 6時50分シャトルバス乗車 → 7時25分上高地BT着 → 7時40分河童橋 → 10時15分横尾 → 12時25分槍沢ロッジ → 14時00分槍沢大曲 → 16時05分水俣乗越 → 17時25分北鎌沢出合（泊）

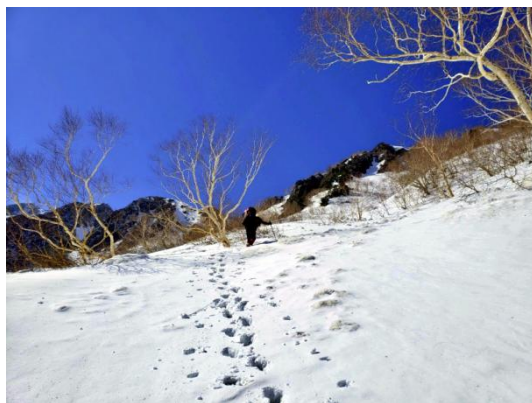


《河童橋にて》

計算すると水俣乗越までの所要時間で55分ほど昨年より余計に掛かっていました。原因は加齢もあるでしょうが、昨年は全速力で歩いていたのに対して、今年は明神、徳沢、横尾、槍沢ロッジの各地点で休憩を入れたり、歩くのも割とのんびりだったこともあったかと思われます。昨年は“冬靴での平坦路全速力”で私が大腿の付け根の筋を痛めていたのに対して、今年は元気いっぱい泊地に到着出来ていたことを考えると、初日はこれくらいでよかったのだと思います。



《槍沢ロッジにてゆっくり休憩》



《水俣乗越への登高》

今年は例年に比べて残雪が多く、横尾から先はほぼ雪道、槍沢ロッジからはアイゼン着用が可能でした。雪が多いことで一部踏み抜き地帯もありましたが、全体には水俣乗越への登高と天上沢の下降は容易になっていました。



《水俣乗越に到達》



《泊地にて北鎌沢を望む》

■4月30日（水） 快晴

4時05分北鎌沢出合発 → 7時30分北鎌のコル → 11時30分独標直下 → 13時55分独標 → 15時45分泊地

昨年は北鎌沢登高開始後2時間50分、残りh40mの地点で過換気症状（後から分かったことだが）により撤退している。

今年は3時間25分かけて標高差950mの北鎌沢右俣を登り切りました。登る前から「今年はマイペースでゆっくり登ります」と宣言させてもらって、とにかくオーバーペースにならないことを心掛けました。



北鎌沢右俣を登高。
雪は安定しておりジグザグ歩行で登り易かった。



クレバスなどで適宜休憩しながらマイペースで登る

個人的には核心は北鎌沢の標高差 950m と思っていたので、北鎌のコルに到達したときは、この先進めば進むほど撤退が困難になるとは言え、この先への不安よりこの先へ進める喜びの方が大きかったです。

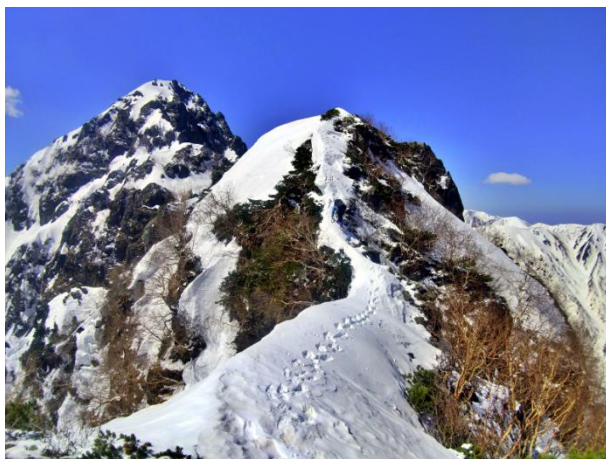


《稜線まであと少し》



《北鎌のコルに到達》

北鎌のコルから先も雪稜登攀ではオーバーペースにならないこと意識し続けました。中山さんは北西風の強さを気にしていましたが、気圧配置の変化からして風が落ちるのは確実だと思っていたので、そこは心配していませんでした。共同装備（テント・ロープ）を私が背負っていることもあり、中山さんが常に先行してルートを見つけ、ステップを付けてくれていました。



《常に中山さんが先行 左に独標が見えた》



《中央のルンゼが独標の核心》

コルから 4 時間で独標直下の難所に到着、ロープを出しました。

1 ピッチ目のルンゼは中山さん、2 ピッチ目の岩場は土橋、3 ピッチ目の岩場は中山さん。核心は 1 ピッチ目で傾斜の立ったアイゼンの効かない雪のルンゼでした。足を踏み固め、アックスを雪壁に突っ込み、木の根とスノーバーで適度な間隔で中間支点を取りながらこれをクリア。2, 3 ピッチ目は快適に登って、あとは広い雪稜を 30m ほど登ると独標山頂となり、ここで小休止としました。



《独標頂上から大槍を望む》



《独標にて小休止中》

独標を下り、次のピークへ登る途中が、尾根縦走で最もルートに迷う場所でした。岩頭を直登か、右下の崖沿いか・・・と思ってたら、中山さんがロープを着けて岩頭左の狭いスペースに足場を見出し通過してくれました。

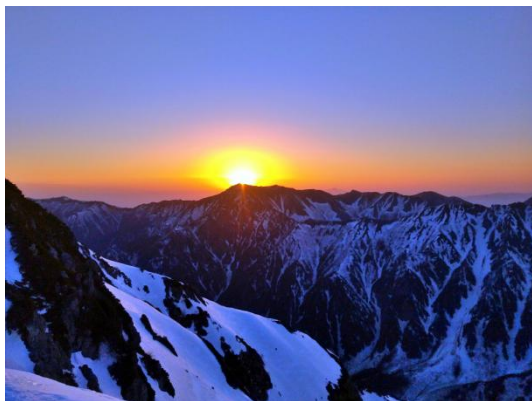
ロープを4ピッチ出したことなどで時間を消費したので、「次のビバーク可能な場所で行動終了にしよう」としたところ、ほどなく適地が見つかり防風壁を作ってテントを張りました。



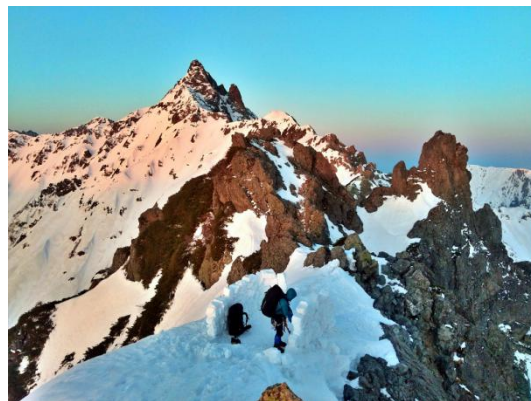
《稜線上の適地にてテントを張る》

■5月1日（木） 快晴

5時00分泊地発 → 9時30分北鎌平 → 10時15分大槍基部 → 13時20分
槍ヶ岳山頂 → 14時20分槍ヶ岳山荘 → 15時40分槍沢大曲 → 16時25分
槍沢ロッヂ → 18時35分横尾山荘 → 22時25分小梨平キャンプ場（泊）



《大天井岳から日の出》



《日の出を見てから出発》

夜は稜線とは思えないほどほとんど無風で暖かく、良く眠ることができました。
 行動開始即アイゼンで岩稜を下りたり登ったり。準備運動もないので息も切れるし足捌きもイマイチだが、すぐに強引に慣らされる。



《朝イチから岩稜歩き》



《クライムダウン》

この日も昨日と同じく岩&雪を登ったり下ったり。東斜面の雪は朝から緩い。
 出発してから2時間後の大きめのピークは、東面の雪壁を横に走るクレバスを足場に楽に巻くことができラッキーでした。



《雪稜を登る》



《懸垂下降は2か所》

出発から4時間20分、北鎌平に到着。少し日数を経た感じのビバーク跡がひとつだけありました。北鎌平から傾斜のある広い雪稜を100mほど登ると大槍取り付き。ここからロープを出して大槍への登攀開始。



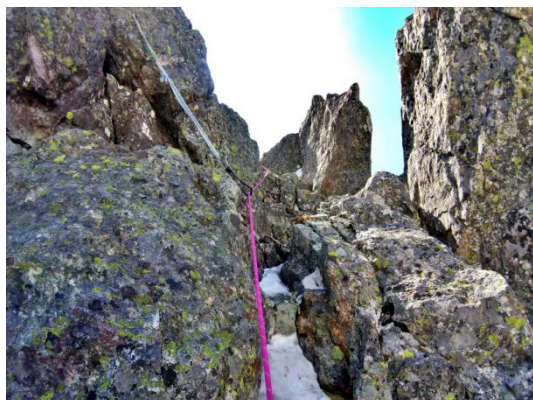
《北鎌平》



《大槍登攀開始》

我々は早め早めにピッチを切ったので5ピッチとなりましたが、切り方によっては4ピッチと思います。荷物を背負っていても特に難しいピッチはありません。敢えて言えば最終ピッチ（上部チムニー）で思い切り良く足を上げてスタンスを捉えるところ、身体を壁に押し付けてレストするところ、そこから立った壁を乗り越えるところで浮いた岩を掴まないようにするところが注意点だったかと思います。

5ピッチをつるべで登り、最終ピッチは中山さんとなりました。なので中山さんが先に登頂、ピナクルを支点に私をビレイし私も登頂しました。



《 岩の間を登ってゆく 》



《祠の裏から山頂に出る》

山頂にはソロの男性ハイカーの方がいたので、幸運にも2人で揃って写真を撮ってもらうことができました。天気は快晴、風も微弱、360℃残雪の北アルプスの風景を楽しむことができました、が・・・中山さんは「やっぱり厳冬の方が良かったですねー」とのこと（笑）私もそのとき（2023年末）からそれほど時間も経っていないこともあってか、景色への感動はそんなに無かったですね（笑）「もう登らなくていい」と「あとは整備されたルート」という脱力感が気持ちよかったです。



《登頂しました！嬉しい！》



《歩いてきた北鎌尾根》



《穂高方面》



《安心のはしごを下ります》



《自販機のジュースで祝杯》

その後はそそくさと穂先を下りて山荘の自販機でジュースを買って喉に流し込み軽く祝杯を上げ、シリセードも交えながら槍沢を下山。一気に上高地まで下山してタクシーで駐車場に移動する目論見でした。



《槍沢を一気に下ります》

横尾を過ぎると「もうとっくに限界」という中山さんの歩行ペースが徐々にスロウダウン。いつもなら林道はそれぞれのペースで次のポイントまで歩くところですが、熊の出没する区域でもあるので最後まで2人行動。明神でスマホで調べたところ、上高地のタクシーの受付は18時までとのこと、夜遅く着いた小梨平にて大きな音を出さないようにテントを張り、そのまま就寝としました。

■5月2日（金）（朝）くもり

5時30分小梨平発 → 6時00分上高地BTの「上高地食堂」にて朝食 → 7時00分上高地BT発（シャトルバス） → 平湯あかんだな駐車場 → 「平湯の湯」露店風呂（300円）にて入浴 → 18時30分頃帰北

【感想】

リタイヤした昨年よりトレーニングをしっかりと行い、ペース配分を丁寧にすることで無事に残雪の北鎌尾根を踏破することができました。

北鎌尾根というものの存在を初めて知ったのは2018年に初めて槍ヶ岳に登頂し、そこから縦走して燕山荘に宿泊したときでした。夕食で同席した登山者が「若いころ厳冬期に貧乏沢を下り北鎌尾根を踏破した」という話を聞いたのが出会いでした。

その後、いくつかの山岳小説を読んだり、山行記録を見聞きし、時期が来たらいつか行きたいと思っていたところ、2020年から嵐に入会し、山行やトレーニングで経験を積み、昨年の初挑戦となったのでした。

リスクはあれども残雪期は著しく難度が高いとまでは言えません。今では多数の山行記録が報告されていて、しっかり準備をすれば私のようなそこそこの登山者でもある程度の確率で踏破できるルートにはなっているのは知っています。それでも「北鎌尾根」という名前の持つ輝きを感じるからこそ再挑戦もしましたし、踏破した今は私の大切な宝物になったと思っています。

今回も同行してくれた中山さんには、昨年の北鎌だけでなく、その前のGW劔岳山行でも私の体調不良でご迷惑をおかけしたにも関わらず、いずれも私の願望を受

け入れて再挑戦（事前トレーニングを始めとする準備を含め）に付き合っていたこと、深く感謝します。ありがとうございます。

また、入会以来技術指導や多くの助言をいただいた会の諸先輩方にも心から感謝申し上げます。引き続きのご指導、どうぞよろしくお願いいたします。

